The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	香りと記号 : 源氏香之図をめぐって
Author(s)	岩崎, 陽子
Citation	デザイン理論. 2005, 46, p. 178-179
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52828
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

香りと記号
── 源氏香之図をめぐって ──

岩﨑陽子／同志社大学ヒューマン・セキュリティ研究センター特別研究員

和柄ブームの昨今，街の中で友禅模様や伝統的な装飾模様をあしらった衣服や小物をしばしば目にする。目を奪われるような艶やかさをもつものもあれば，しっとりと落ち着いた雰囲気を醸すものもある。しかし和の意匠として最も興味深いものは，江戸寛永期に成立したといわれ，単純な直線による構成の中に奥行きのある文学の世界を凝縮した「源氏香之図」ではないだろうか。これはもともと，世界唯一の香りをめぐる芸道である「香道」に端を発した意匠である。

「源氏香」は組香の一種である。そこで使用されるのが「源氏香之図」である。組香とは，幾人かが集い，香をめぐって行う一種のゲームである。香を遊戯として楽しみ始めた初期の段階では，その形式は単純なものが多かった。しかし，のちに源氏香のような複雑な遊びもあらわれる。一説に享保年間にまで遡るといわれている源氏香が，正確にいつ成立したものか，また誰が考案したのかは定かではない。しかし三種の香をたく三種炷の三種香，四種炷の系図香を経て，五種炷の源氏香の形ができあがったものと思われる。源氏香では，五種の香を準備し，各五包計二十五包をうち混ぜる。その中から五包を取り出して炷き出す。参席者は順にその五つの香を聞き，記紙に結果を書き付ける。この際描かれるのが源氏香之図である。源氏香之図は，右から順に縦線を五本引く。これが右から順に一炉の香，二炉の香とつづき，そして一番左端が五炉の香を示す。このうち，同じ香だと思われるものを横線で結ぶ。そうすることによって，五十二通りの図が存在し得る。これらの図に源氏物語五十四帖のうち，最初の桐壺と最後の夢浮橋をのぞく五十二帖の名がつけられている。五本の縦線とそれを上部でつなぐ横線。そのヴァリエーションが五十二通りあるということから，源氏物語が連想され，図柄と巻名が結び付けられた。（例えば第一香と第二香が同じものであり，あとの三香がそれぞれ異なる場合，これは「空蝉」である。）五つの香を聞き終えた後，参席者は記紙に源氏香之図を描く。そして順に回されてくる「源氏香之図帖」をみて，自分の図の名称を確認し，その図の下に若紫や，初音といった名称を書き込む。正解者には「玉」という字があてられる。これは玉という字が五画であること，また源氏物語の冒頭にあるように，光源氏が「玉」のような男の子であったいうことに由来するものである。しかし，ここでは単なるゲームとして解答の正否を競うのではなく，源氏物語によって繰り広げられる優雅な王朝絵巻のイメージを，参席者全員で楽しむことが趣旨とされる。

江戸時代以降，多くの意匠の場面で取り上げられ，親しまれてきた源氏香之図であるが，その図柄と巻名の結び付きについて，はっきりとしたことはわかっていない。最初の桐壺と最後の夢浮橋を除くと，帚木と手習は，図柄として巻の始まりと終わりを示すのに相応しい。しかしその他の図柄については，そこに法則性を見出すことは困難である。これを説明しようとする現代の研究もいくつかある。しかし，源氏香之図の魅力は，図柄と巻名の結び付きについての謎解き問題にではなく，やはりシンプルで幾何学的でありながら，存

在感のある図柄そのものにある。この魅力のゆえにこそ，源氏香之図は組香という一種のゲームから独立して和菓子，着物，工芸品などに意匠として使用されるようになった。

九鬼周造は『「いき」の構造』の中で，源氏香之図を「いき」なものの一つとしてとらえようとしている。九鬼は，人間の目が左右に並ぶという理由から，横縞よりも縦縞の方が容易に二つの線が平行線として知覚され，この平行線の二元性（決して交わることはないという性質）が「いき」の効果を表すという冗談とも本気ともつかない分析の後，その具体例として，縦の平行線を含む源氏香之図をとりあげる。九鬼によれば，平行線は「異性間の二元的，動的可能性が可能性のまま絶対化されたもの」としての，緊張関係を暗示している。九鬼の「源氏香之図＝『いき』」とする関係づけには必ずしも賛成しかねるが，源氏香之図には，平行線が暗示する緊張関係のほかにも，九鬼の「いき」の分析に共通する要素が数多く存在する。それはリズム，アシンメトリー，間接性，想像力，簡潔性等であり，源氏香之図に備わるこれらの要素が，この図が永く流行の浮き沈みを越え，現代まで意匠として残る理由であろう。

源氏香之図は，普段気づかれることは稀であろうが，現代でも広範囲にわたって意匠として使用されている。建築の一部，着物柄，和菓子の模様，包装紙，その他源氏物語各帖の内容に因む吉凶をさりげなく示すものとして，慶弔の小物にあしらわれることもある。その使用のされ方を見る限り，源氏香之図は，記号としてその意味するところを直接的に示すのではなく，その形態の内容を知る人ぞ知るという性格を多分にもち，またそのシンプルな意匠の背後に，非常に豊かな源氏物語の世界が広がるという特異なあり方をする。こうした図柄の香道における成立と，「香りを記号にする」という性格は多分に関係するものであると思われる。香りは曖昧なものであり，香道においても，嗅覚のみならず五感を全て使ってその存在が表現されてきた。組香には和歌や文学に因んだものが非常に多い。五つの香の異同を参席者たちが回答する際に用いられるものであった。しかし，遊戯の優劣を競うだけであるなら，図そのものでよかったのであり，それにわざわざ源氏物語の帖名まで付加しなくてもよいはずである。これは香りという曖昧でとらえどころのないものを手がかりに，幾人かで一つの世界を共有するための手段としての工夫であった。香についての表現はそれほど困難なものである。例えば，「五味」は，商人でありながら，東福門院に見出された，米川常白という香の名人が編み出した香の分類法がある。これは「甘，酸，辛，苦，鹹（かん・塩からい）」という五つの味覚表現を，嗅覚を表現する際に用いる方法である。香木を熱した際に立ち上る香を，「甘い香り」や「辛い香り」と識別する。最高級の香木であるとされる伽羅のうちでも，特に名香と賞される，正倉院宝物である「蘭奢待」は，これら五つの味を併せ持つとされる。嗅覚を味覚の表現を借りて行うのは，嗅覚が非常に曖昧なものだからであろう。その上，人間の鼻はすぐに香りに慣れてしまい，判断そのものが長続きしない。したがって，先人の知恵は，嗅覚を味覚で表し，曖昧な香りを，記憶の中に固定化することを考え出した。組香にしばしば古典文学や和歌が取り入れられるのは，こうした香りを，味覚で表現する以上に，高度な遊戯性をもって，文学や和歌の世界へと結びつけるための手段であった。そうした中でも，源氏香之図は，香りと源氏物語の世界を，記号として結び，またその記号そのものが非常にすぐれた意匠をもつという，特殊な存在であるといえよう。